

## 運動部活動の活性化

～海部高校バスケットボール部の取り組み～

徳島県立海部高等学校

澁谷 直子

## 1. はじめに

### (1) 徳島県立海部高等学校について

本校は、徳島県の最南端に位置し、平成 16 年 4 月、徳島県立日和佐高等学校・徳島県立海南高等学校・徳島県立宍喰商業高等学校の郡内 3 校が再編統合され、開校し、校舎は海南高校のものを引き継いでいる。本年度で開校 15 年目を迎え、「絆・学・夢」を校訓として、勉学と部活動の両立による教育活動の充実を図っている。普通科、情報ビジネス科、数理科学科の 3 つの学科があり、生徒数は、322 人である。進路については、毎年おおよそ、3 分の 2 が進学、3 分の 1 が就職といった状況である。

旧海南高校時代には、昭和 39 年に野球・昭和 42 年に男子バスケットボール・昭和 62 年ボクシングでそれぞれ全国制覇を果たしたこともあり、プロ野球選手・プロバスケットボール選手・プロボクサー・プロゴルファーなどを輩出している。

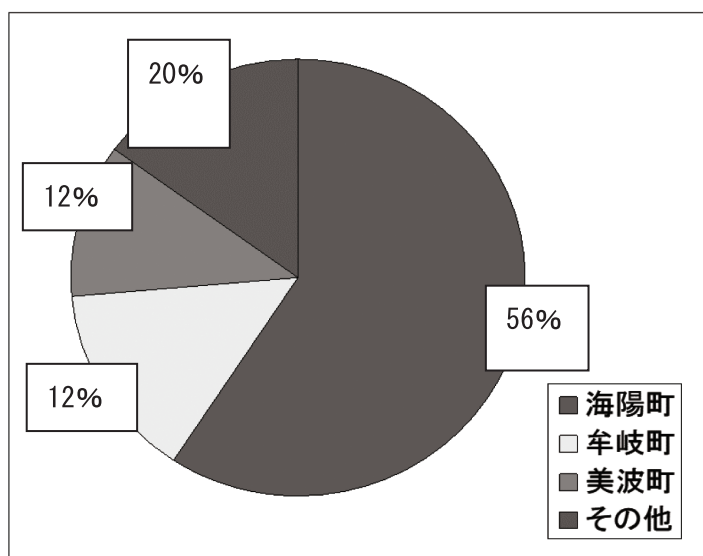
現在は、運動部のために、寮を併設しており、定員は、男子 28 名・女子 10 名の計 38 名を 1 室 2 名の部屋割りで受け入れている。現在、男子 19 名・女子 8 名の計 27 名が在寮している。

本校在籍生徒のうち、約 80% が海部郡内在住である。しかし、過疎化に伴い、年々児童生徒数も減り、開校当時から比べると生徒数は 54% の落ち込みで、今後その傾向が続く恐れがあり、学校として危機感をおぼえている。

海陽町の人口（1980 年～2015 年）

15 歳～19 歳の人口

海部高校生在住所（H30 年度）



1980 年	876 人
1990 年	695 人
2000 年	576 人
2010 年	408 人
2015 年	360 人
将来	
2020 年	272 人
2030 年	147 人
2040 年	93 人
2045 年	76 人

### (2) 主題設定の理由

海部高校は、前述のように、過疎化や少子高齢化が、深刻な問題になってきている。また、少人数が分散している地理的要因や、公共交通機関である鉄道が海岸線沿いのみであるなど、寡少であるため、生活は車での移動に頼らざるを得ない地域である。日本中の地方が抱える多くの課題が集約されたエリアとも言える。

しかし、このような多くの課題を抱えた地域であっても、自らの地域の未来に希望を持ち、個性豊かで潤いのある生活を送ることのできる学校にしたい。さらには、学校の発展を地域創生に繋げたいという強い思いがあり、そこから、「田舎でも魅力ある学校作りができるという方法を見つけたい」と考えた。

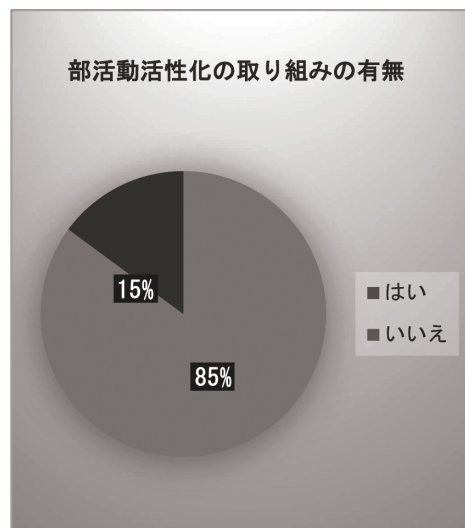
そこで、海部高校では、海南高校時より、バスケットボールが伝統的に活躍してきたこともあり、現在、地域の強い期待や手厚い支援を受けて競技力向上に取り組んでいる。活動環境をさらに充実させ、四国大会優勝・全国大会ベスト 8 進出を目標に掲げ、その目標達成の取り組みを計画的かつ継続的に行っ

ている。部活動の活性化と地域創生に繋がっているその活動内容と成果を報告するとともに、今後の課題について考えてみたいと思い、主題を設定した。

## 2. 徳島県の運動部活動活性化の取り組み

### (1) 取り組みの有無

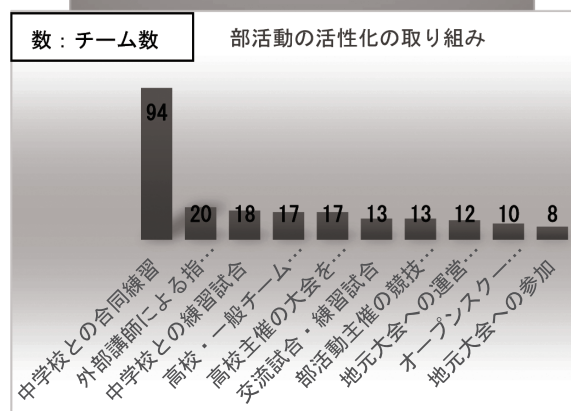
まず、この研究を始めるにあたって、部活動の活性化についてのアンケートを徳島県内の県立学校運動部を対象に実施した。アンケート内容と結果は、次の通りである。徳島県内の県立高校 31 校 36 競技 255 の部活動から回答をいただいた。「部活動の活性化の取り組みをしていますか」という質問に対して、217 の部活動が「はい」、38 の部活動が「いいえ」との回答だった。85%の徳島県の運動部が部活動の活性化に取り組んでいることがわかった。



### (2) 部活動活性化の取り組み内容

特に取り組みの多いもの

1. 中学校との合同練習
2. 外部指導講師による指導
3. 中学校との練習試合
4. 高校主催の大会を開催
4. 高校・一般チームとの合同練習



## 3. 海部高校の部活動活性化への取り組み（男子バスケットボール部）

### (1) 指導者及び競技者講習会の開催

- H27 年度 ①〔講師〕日高哲朗先生（現千葉大学・元ユニバーシアードコーチ）  
 〔参加者〕本校生、中学生、県内指導者〔実施〕9月（2日間）  
 〔場所〕海部高校
- ②〔講師〕小野秀二先生（元日本代表ヘッドコーチ）  
 〔参加者〕本校生、高知工業高校生〔実施〕8月（2日間）  
 〔場所〕高知工業高校
- H28 年度 ①〔講師〕日高哲朗先生（現千葉大学・元ユニバーシアードコーチ）  
 〔参加者〕本校生、中学生、県内指導者〔実施〕9月（2日間）  
 〔場所〕海部高校
- ②〔講師〕小野秀二先生（元日本代表ヘッドコーチ）  
 〔参加者〕本校生、高知工業高校生〔実施〕8月（2日間）  
 〔場所〕高知工業高校
- H29 年度 ①〔講師〕日高哲朗先生（現千葉大学・元ユニバーシアードコーチ）  
 〔参加者〕本校生、中学生、県内指導者〔実施〕9月（2日間）  
 〔場所〕海部高校
- ②〔講師〕小野秀二先生（元日本代表ヘッドコーチ）

〔参加者〕 本校生、高知工業高校生〔実施〕 8月（2日間）

〔場所〕 高知工業高校

③ 〔講師〕 恩塚亨先生

（女子全日本チームアシスタントコーチ・2017 女子インカレ優勝監督）

〔参加者〕 本校生、中学生、県内指導者〔実施〕 2月（2日間）

〔場所〕 海部高校

徳島県や海陽町、海南・海部高校 OB 会からの多大な支援により、トップ指導者による講習会を年に複数回実施することが可能となり、指導者の指導力向上、選手の競技力向上に繋がっている。また、地域の中学生や県内の指導者にも案内し、海部高校が新しい情報発信の場となるようにも取り組んでいる。

（2）海南カップ（中学生交流大会）の開催運営

当初は OB 会の提案から始まった大会で、海陽町や海南・海部高校 OB 会からの多大な支援により、毎年 2 月の 2 日間にわたり開催し、昨年度、第 20 回を迎えることができた（H29 年度）。大会は、「おもてなし」の心を大切に、中学生にバスケットボールを通して、海部の魅力を感じてもらえるよう、海部高校バスケットボール部が運営を行っている。同時に、バスケットボールの競技レベル向上、スポーツを通じた地域貢献活動を積極的に進めている。現在は、男女 12 チームずつが参加。地元・県内トップチームのみならず、県外チームも参加している。H29 年度は、高知県・兵庫県・京都府からの参加があった。また、中学校指導者と密なネットワークを構築する場にもなっている。

① 海南カップアンケート

中学生のバスケットボールへの意識調査と今後の海南カップを益々充実させる手段を探るべく、アンケートを実施し、集計・考察を行った。第 20 回海南カップに参加した全てのチームにアンケートを実施した。

海南カップアンケート集計結果

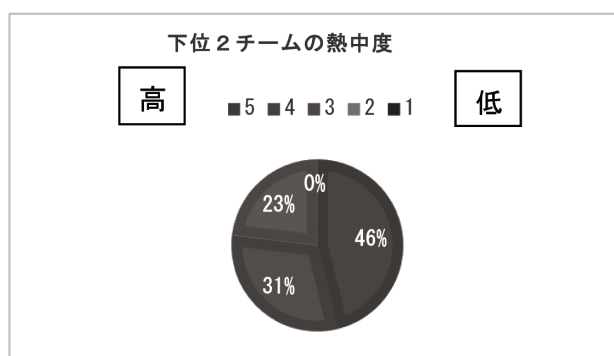
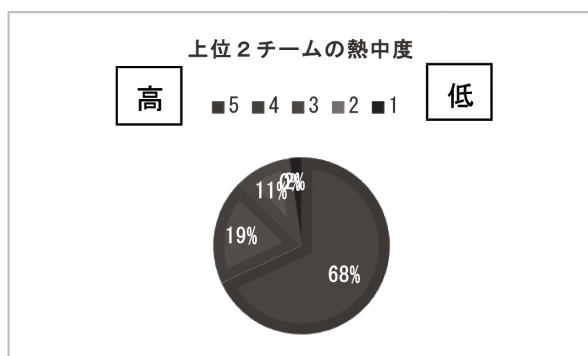
Q1 人数 17 校 23 チーム 計 254 名

Q2 学年 1 年生 136 名 2 年生 118 名

Q3 バスケットボール歴 1～3 年 129 名 4～6 年 90 名 7 年以上 35 名

Q5 バスケットボールへの熱中度

海南カップ上位 2 チームと下位 2 チームのバスケットボールへの熱中度を調べたところ、下のグラフのように、大会成績に比例して熱中度も高くなる結果となった。

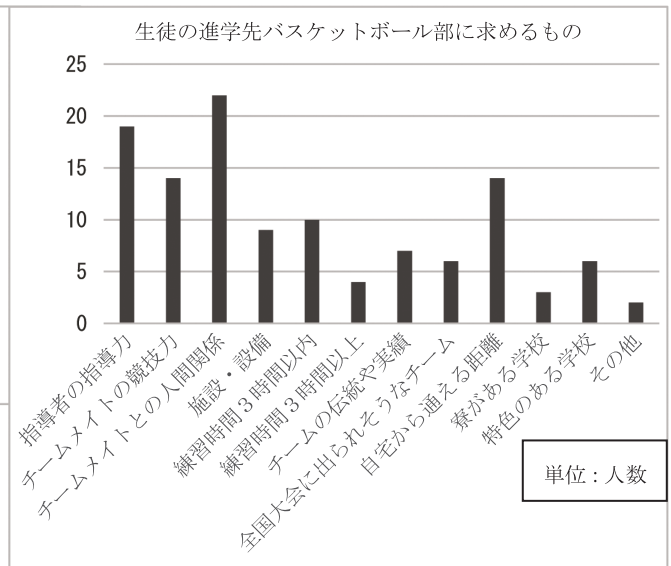
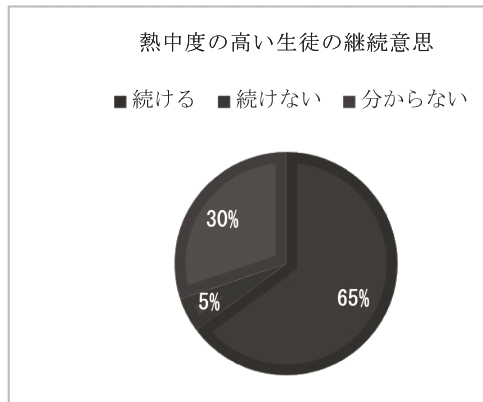


Q6 高校でのバスケットボール継続意思

バスケットボール熱中度の高い生徒（熱中度 4・5）は、高校でのバスケットボール継続意思が 65%であった。また、熱中度の低い生徒（熱中度 1・2・3）は、13%とかなり低いものであった。発達心理学によると、新しくできるようになることが、次の活動へと発展するとある。つまり、子どもが何かに熱中すること

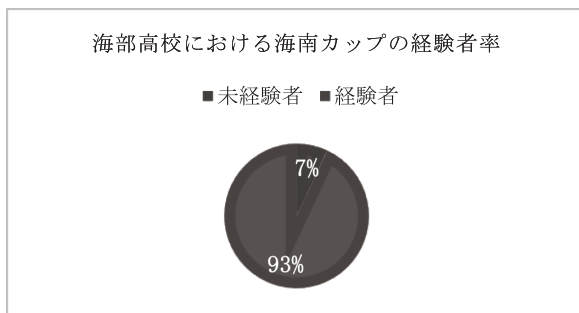
は、子どもが自ら学びたいと思うことである。これにより、新しく技術を身につけ、勝利を味わうことによって、さらに学び、成長したいと考える生徒の育成と熱中度は密接に関係すると考えられる。熱中することが大事であり、中学生を熱中させるためには、成功体験を多く経験させることが、モチベーションを上げるきっかけになり、興味関心に繋がっていくと考えられる。

Q7 あなたが進学先（高校）でバスケットボールを続けるとしたら、何を望みますか？という質問に対し、「チームメイトとの人間関係」「指導者の指導力」「チームメイトの競技力」「自宅から通える距離」の順に回答が得られた。Q5の結果より、上位チームの方が熱中度高く、さらに熱中度高い生徒ほど継続意思も高かったため、上位チームに属することが求められるのかと考え、「チームの伝統や実績」・「全国大会に出られそうなチーム」が上位にくると予想したが、一番多かったのは、「チームメイトとの人間関係」であった。この内容に直接関与することはできないが、ある社会心理学者によると、集団作りをする際に、競技力向上と人間関係を両方重視するに越したことはないが、人間関係を重視した行動の方が好ましいと科学的に分析されている。このようなことから、人間関係を重視した上で、より高い競技レベルが求められているのではないかと考察される。上位にランクインした「指導者の指導力」「チームメイトの競技力」から、自分自身がより成長できる環境を強化することが求められていると考える。また、スカウティングについても、より重要性を求めて取り組むべきである。そして、「自宅から通える距離」については、本校にとっては、苦戦する内容である。しかし、そのハンデを乗り越えるため、地域の特性に即し、安心して生活できる支援体制の整備と魅力ある学校・部活動を創り上げて行くことが課題にあげられる。



チームメイトの競技力」「自宅から通える距離」の順に回答が得られた。Q5の結果より、上位チームの方が熱中度高く、さらに熱中度高い生徒ほど継続意思も高かったため、上位チームに属することが求められるのかと考え、「チームの伝統や実績」・「全国大会に出られそうなチーム」が上位にくると予想したが、一番多かったのは、「チームメイトとの人間関係」であった。この内容に直接関与することはできないが、ある社会心理学者によると、集団作りをする際に、競技力向上と人間関係を両方重視するに越したことはないが、人間関係を重視した行動の方が好ましいと科学的に分析されている。このようなことから、人間関係を重視した上で、より高い競技レベルが求められているのではないかと考察される。上位にランクインした「指導者の指導力」「チームメイトの競技力」から、自分自身がより成長できる環境を強化することが求められていると考える。また、スカウティングについても、より重要性を求めて取り組むべきである。そして、「自宅から通える距離」については、本校にとっては、苦戦する内容である。しかし、そのハンデを乗り越えるため、地域の特性に即し、安心して生活できる支援体制の整備と魅力ある学校・部活動を創り上げて行くことが課題にあげられる。

### ② 海部高校における海南カップの経験者率



	学年	部員数	経験者（寮生）
男子	3	14	12（6）
	2	5	5（2）
	1	9	8（1）
女子	3	7	7（1）
	2	4	4（2）
	1	4	4（4）

### ③ 海南カップにおける今後の課題

アンケート結果の満足度やその内容より、海南カップの今後の課題は三点挙げられる。一点目は、さらにスムーズな大会運営が行えるよう、海部高校生の自ら考え行動する力の育成や運営準備を綿密に行うことである。二点目は、不満足の原因理由の中に、「自分のプレーがうまくいかなかった」や「チームに成績結果がでなかった」など、「成績を上げたい」「うまくなりたい」などの内容から、互いの競技力向上に対して、日頃から、海部高校生と合同練習や練習試合をするなど大会としてのレベルを充実させることである。三点目は、イベントとしての向上として、中学生同士、高校生と中学生

の交流が深まるようなレクリエーション要素を盛り込み楽しい交流の場としてプロデュースすることである。これらのことを、来年の海南カップに活かし、さらに参加中学生の満足度を上げられるような大会にしていきたい。そして、模範となるような選手の育成と風通しの良いチーム作りで、中学生に求められるバスケットボール部として、海部高校をさらに発展させる課題がある。

(3) 海部寮の充実（食事の改善及び地域との連携）

海部寮の食事は、平日は朝昼晩三食とも学校の食堂より提供されている。しかし、土日や長期休業中の食事はこれまで、各自用意する状況であった。スポーツにおける食事の重要性や生徒の栄養管理の面からも、寮の食事の仕組みを改善すべきであると部内でも改良を行ってきた。また、保護者や生徒からも栄養面や食費の面などから、休日の食事の提供の要望もあった。まず、土日・長期休業中の朝食については、地域スーパーの協力で、お弁当が安値で提供されることが決定した。さらに、寮の食事に関しての声が地域にも聞こえていったことで、地域の方々の協力のもと、「NPO 法人あったかいよう」が設立され、土日・長期休業中の昼夜の食事が提供されることが決定した。

徳島新聞にも掲載され、地域の方々やOB・OGの皆さんからの食材の寄付もよせられている。また、ただ作ってもらうだけではなく、生徒も一緒に作ったり、配膳、片付けを行う。これは、このNPOが、寮生にバランスの良い食事をしてほしい、食卓の場が少しでも家庭に近い息抜き場となってほしい、将来の自立への訓練としての場としたいというような、地域の方々の温かい思いを持って設立されたためである。地域の方々との会話も楽しみながら、美味しく食事をいただけるようになった。

(4) 「NEO 徳島トップスポーツ校強化事業」の指定

この事業は、県教育委員会が高校運動部の育成・強化を目指し2019年度から導入する制度で、指定校として24校45部が強化することに決められた。本年度の実績を加味し、強化費助成と優秀な人材を集めるための推薦入試枠が得られる強化指定校と、入試枠のみが与えられる育成指定校に分ける。全国大会の上位入賞を目指し、現行制度を改善して成果主義を取り入れたものである。

地域の強い期待や手厚い支援を受けて競技力向上に取り組む海部高校が、活動環境をさらに充実させ、四国大会優勝・全国大会ベスト8進出の目標達成の取り組みを計画的かつ継続的に行っていくために指定を受けたいと考え、申請した結果、指定校に選ばれた。

2022年全国高校総合体育大会が四国（高松）で開催される。そこで、徳島県代表として全国で戦える強いチームを作りたいと考えている。

(5) 指導者の育成

前身の旧海南高校は、本県唯一バスケットボール競技で四国4連覇、全国大会優勝を果たした高校であり、その流れを受け継ぐ本校は、今なお県内に多くの指導者を輩出している。中学校に10名、高校にも6名の旧海南・海部高校OBの指導者がおり、それらの指導者が監督を務めるチームが全国大会に出場して他県の強豪校と競い合うことで、競技力において本県を牽引するだけでなく、幅広い年齢層での競技者数の増加、とりわけ少年チームの底上げに大きく貢献している。

(6) その他

県外遠征の実施(年間10回以上)

外部指導講師による指導(フィジカルトレーナー、管理栄養士)

地元中学校との合同練習の開催(毎月1回)

中学校との練習試合

防災クラブ(運動部が中心)

など、地域や中学校、競技団体と連携した競技の強化・育成・普及を活動の内容がある。

#### 4. 海部高校の部活動活性化の取り組みの成果

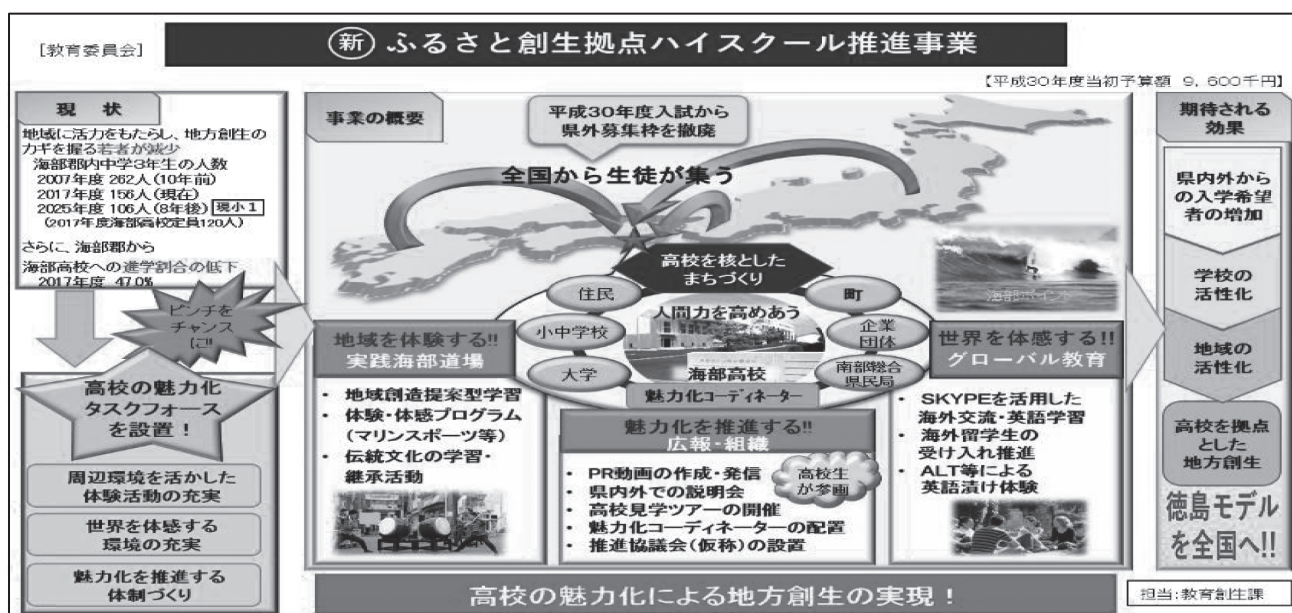
このような取り組みの結果、2018年1月に行われた第70回徳島県新人バスケットボール大会で2008年以來の県大会優勝。そして、6月に行われた第58回徳島県高等学校総合体育大会でも優勝を果たし、インターハイ出場を獲得した。

これは、県教育委員会や地元海陽町をはじめ地域住民の後押しを得ながら、様々な取り組みを実践した成果と言える。また、大会決勝では、地域住民やOB、また、応援バス（2台）で100人を超える本校の生徒職員がかけつけた。大応援団の声援は、選手に大きな勇気と力を与え、地域や学校の絆を感じさせてくれたものであった。

#### 5. まとめ（今後の取り組み）

部活動の活性化が、学校の活性化に繋がり、また、地域の活性化になっていく。このことから、本校での部活動は学校はもとより地域全体の事として捉えていく必要があると考える。そのためには、生徒減少の不安を抱える本校の実情からも、まず、選手獲得を優先したい。取り組みとして、①中学校との合同練習や合宿の実施。②本校主催の海南カップに、県内トップチームの中学校だけでなく、他県強豪地域からの招待をするため、県内外の中学校指導者と密なネットワークを構築する。③様々な県に遠征し、本校の知名度を高めるとともに、寮や充実した施設を活かし、県外有望選手獲得に向けて取り組んでいく。

また、学校としての取り組みとして、ふるさと創生拠点ハイスクール推進事業をすすめる。目的は、地域を挙げて、地元はもとより県外から生徒が集う学校づくりを進めることである。高校の魅力化による地方創生の実現を目指すための3本柱を立て、県・地域・学校が連携しながら活性化していく。



その中のプロジェクトのひとつである広報活動として、PR動画を作成・高校見学ツアーの開催などがある。

そして、海部高校の魅力化による地方創生の実現に向け、地域の強い期待や手厚い支援を受けて競技力向上に取り組む海部高校が、チーム目標である四国大会優勝、全国大会ベスト8以上への進出、個人目標である部活動を通じた人間力の向上の両目標を達成すべく、スタッフ・選手一同が、学校や町からの支援に感謝することを忘れることなく、活動の質と量をさらに高めたいと考える。